

修士論文

印象形成におけるカテゴリー・アクセシビリティ効果に  
確信が与える影響

総ページ数 1～26頁

提出年月日 2017年（平成29年）1月10日

指導教授 沼崎 誠 教授

人文科学研究科 人間科学専攻 心理学教室

博士前期課程2年

15861104 森川 健太

# 論文要旨

所属：首都大学東京大学院 人文科学研究科 人間科学専攻

心理学分野 心理学教室 博士前期課程

学習番号：15861104

氏名：森川 健太

## 要旨

カテゴリー・アクセシビリティ効果（以下、CA 効果）が自分の考えに伴う確信によって調整されるかを検討するために、印象形成課題（Bargh & Pietromonaco, 1982）を改変した2つの実証研究を行った。研究1（ $N=76$ ）では、特性語の閾下呈示によって、カテゴリーのアクセシビリティを操作した後、頭を縦か横に動かしたままストーリーを聞かせ、確信を操作し、登場人物の印象を尋ねた。研究2（ $N=45$ ）では、研究1と同様の方法で特性コンストラクトの接近可能性を操作し、ストーリーを聞かせた後に、経験想起によって確信を操作し、登場人物の印象を尋ねた。実験の結果、研究1ではCA効果が観察された。しかし、確信によってCA効果が調整されるという本研究の仮説を支持する結果は、いずれの実証研究でも得られなかった。本研究の貢献点として、日本国内でこれまで用いられてきた閾下プライムの手続きよりも、実験状況の構築・統制の容易な手続きを確立した点が挙げられる。

キーワード：プライミング効果（priming effect）、カテゴリー・アクセシビリティ効果（category accessibility effect）、自己妥当化（self-validation）、印象形成（impression formation）

「献血を頼まれた人が『自分は糖尿の傾向があるから』と嘘をついて献血を断る」という行動から、わたしたちはこの人物のどのような特性を思い浮かべるだろうか。人の頼みを断る冷たい印象を感じるかもしれないし、この程度のことは誰でもするのでこの人の性格を読み取る材料にはならないと考えるかもしれない。あるいは、咄嗟に献血を断る口実を思いつくような、頭の回転の速い人物像を思い浮かべるかもしれない。このような、複数の解釈が可能な曖昧な情報は、活性化した特性カテゴリーに沿って処理される。たとえば、黒人の留学生と話をし、偏見に基づいたコミュニケーションをとらないように心がけた後は、献血を断る行動が黒人ステレオタイプに含まれる「敵意的だ」「野蛮だ」という特性カテゴリーに沿って処理されやすくなり、献血を断る行動から冷たい印象が感じ取られやすくなる。なぜなら、偏見を抑制しようとするためには、黒人ステレオタイプの内容を思い浮かべておく必要がある、この監視によって黒人ステレオタイプのアクセシビリティが高まってしまうからである。この現象は、カテゴリー・アクセシビリティ効果（category accessibility effect：以下、CA 効果）として知られている。

CA 効果が情報のカテゴリー化によって生じるなら、カテゴリー化をやり直させると CA 効果は弱まるのだろうか。たとえば、いったん「敵意的だ」「野蛮だ」と解釈された献血を断る行動を「頭の回転が早い」と捉え直した時、CA 効果は弱まるだろうか。もしこのようなカテゴリー化のやり直しが生じるとすれば、それはどのような時に生じるのだろうか。本研究の目的は、献血を断る行動のような曖昧な情報から感じ取った印象に確信がなくなった時に、献血を断る行動とは全く無関係な文脈——偶然、偏見を抑制しようとしていたこと——の影響が弱まるという仮説を検討することである。

## CA 効果

アクセシビリティとは、献血を断る行動などの外界の刺激を処理する際に、カテゴリーが活性化する可能性ないしは活性化させるエネルギーのことである（Higgins, 1996）。献血を断る行動のように曖昧すぎてそれだけではカテゴリーを活性化させるには至らない刺激であっても、黒人の偏見を表出しないようにするなど、あらかじめ情報処理を行わせてカテゴリーのアクセシビリティを高めておくと、カテゴリーが活性化し、活性化したカテゴリーに沿った情報処理が行われる。

社会的認知の研究では、アクセシビリティが様々な領域に影響を与えること——CA 効果——が示されてきた。本研究では、その中でも曖昧な他者の行動——たとえば、献血を断る行動——の解釈が特性カテゴリーの活性化によって変化する現象（Higgins, Rholes, & Jones, 1977; Srull & Wyer, 1979）を扱う。

他者の行動の解釈では、たとえば、次のような形で CA 効果が見られる：乱文構成課題に用いる単語の中に敵意に関連する単語が入っている場合には、入っていない場合に比べて、曖昧な文章を読んで登場人物の印象を答える課題において、回答される印象が敵意的になる (Srull & Wyer, 1979)。この CA 効果は、プライム課題——乱文構成課題——中に特性カテゴリーのアクセシビリティが高まり、ターゲット課題——曖昧な文章を読んで登場人物の印象を答える課題——中にその特性カテゴリーが活性化しやすくなり、特性カテゴリーに沿った情報処理が行われやすくなることによって生じると考えられている (Higgins, 1996)。

CA 効果はプライム課題とターゲット課題の関係に参加者が気づいていなくても生じる。このことは次の2つの点から支持される：(1) プライム課題とターゲット課題の関係はカバーストーリーによって伏せたまま実験を行い、プライム課題の影響を疑った参加者を分析対象から除いても、CA 効果が観察される (e.g., Higgins, Bargh, & Lombardi, 1985)。

(2) プライム課題中に敵意に関連する単語を閾下呈示した場合——特性カテゴリーのアクセシビリティを高めた原因に気づく余地がない場合——にも CA 効果が観察される (e.g., Bargh & Pietromonaco, 1982)。このように、プライム課題がターゲット課題に与える影響に参加者が気づいていなくても CA 効果が生じるという意味で、CA 効果は無意識に生じる。

CA 効果はプライム課題がターゲット課題に与える影響に気づいていなくても生じる。しかし、わたしたちは活性化したカテゴリーに沿って他者の行動を解釈しても良いかを評価しており、この評価——主観的有用性<sup>1</sup> (judged usability) ——が CA 効果の生起に影響を与え、活性化したカテゴリーに沿って判断が行われるかが決まると考えられている

(Higgins, 1996)。たとえば、Greifeneder & Bless (2010) は、乱文構成課題の難しさを操作することによってアクセシビリティの上昇に伴う主観的な容易さを操作し、乱文構成課題が容易な場合に限って CA 効果が生起することを示している。Greifeneder & Bless (2010) が示した結果は、乱文構成課題の最中に感じた容易さ・困難さが主観的有用性に影響し、CA 効果の生起を調整したのだと考えられる。

---

<sup>1</sup>アクセシビリティの主観的有用性を生起させる原因は内省可能であると考えられる。たとえば、本パラグラフで引用している Greifeneder & Bless (2010) では、乱文構成課題の難しさの操作の妥当性を確かめるために、予備実験において乱文構成課題の難しさを評定尺度法で尋ねている。判断時に行われる主観的有用性の評価は意識的に行われていると想定されている (Higgins, 1996)。

## 確信

### 確信と主観的有用性

確信とは、自分の考え・態度に伴う自信や、主観的な確からしさ・妥当さのことを指す (Briñol & Petty, 2009; Gross, Holtz, & Miller, 1995)。確信の伴った考えは態度に反映されやすいことが分かっている。たとえば、Petty, Briñol, & Tormala (2002) は、大学に上級試験を導入することのメリットを説得的に述べた文章——上級試験の導入に肯定的な考えが生成される文章——と、あまり説得的に述べられていない文章——上級試験の導入に否定的な考えが生成される文章——を読ませ、文章を読んで考えたことを列挙させた後、試験の導入の賛否を尋ねた。実験の結果、自分の考えに伴う自信や自分自身に感じる自信が、説得的メッセージを読んで考えたことと上級試験導入への賛否の関係を強めることが明らかになった。つまり、確信が高い場合にはメリットを説得的に述べた文章を読んだときのほうが、あまり説得的に述べられていない文章を読んだときよりも、上級試験の導入に好意的であった。しかし、確信のない場合にはあまり説得的に述べられていない文章を読んだときのほうが、上級試験の導入に好意的であった。Petty et al. (2002) が示した結果は、確信が説得的メッセージによって生じた考えと態度の関係を強めることを示している。この結果を踏まえると、活性化したカテゴリーに沿って他者の行動を解釈しても良いかという評価——主観的有用性——に、確信が影響を与える可能性を想定できる (類似した議論として Loersch & Payne, 2011)。

他者の行動の解釈における CA 効果と確信の関係について明示的に調べた研究は、著者の知る限り、公刊されていない。しかし、確信の有無が CA 効果を強めたり弱めたりする可能性を示す研究は公刊されている。Thompson, Roman, Moskowitz, Chaiken, & Bargh

(1994) は乱文構成課題の後・多義的な文章を読んで登場人物の印象を答える課題<sup>2</sup>の直前に説明責任を導入することで、CA 効果が弱まることを示している。説明責任は自信過剰バイアスを抑制すること (Tetlock & Kim, 1987) が示されているため、説明責任を導入しなくても、確信を変化させることさえできれば、CA 効果の抑制が生じる可能性が示唆される。ただし、自信過剰バイアスは、判断の正確さに比べて確信が不釣り合いに高いことを指しているため、自信過剰バイアスの抑制——判断の正確さと確信の高さが釣り合っている状態——には次の2つの可能性が考えられる：(1) 確信は変わらないが、判断の正確

---

<sup>2</sup> 多義的な文章とは「太平洋をヨットで横断しようとする」といった、勇敢とも無謀とも解釈できる文章のことである。このような好意的にも否定的にも解釈できる文章でも CA 効果は生起する (Higgins et al., 1977)。本研究では、曖昧な文章——献血を断る——で見られる CA 効果と多義的な文章で見られる CA 効果の間に、区別は必要ないと仮定する。この仮定は CA 効果に関するメタ分析でも採用されている (DeCoster & Claypool, 2004)。

性が高まる。(2) 判断の正確性は変わらないが、確信が低まる。もし (1) であるとするれば、説明責任の導入によって確信は変化していない。したがって、説明責任の導入が自信過剰バイアスと CA 効果の両方を抑制するとしても、確信が CA 効果を調整するかは明らかではない。

本研究の目的は、確信の伴った考えは判断に影響を与えやすいという仮説（自己妥当化仮説：Briñol & Petty, 2009）に基づいて、確信が CA 効果を強めたり弱めたりするかを直接調べることである。

### 確信を操作する手続き

確信は次の2つの研究文脈で調べられてきた：(1) 態度の強さ——他者からの介入によって変化しにくい態度や、行動を良く予測する態度の性質——の研究（Gross et al., 1995）と、(2) 考えと態度・判断の一貫性——態度・判断に影響を与える考えの性質——の研究（自己妥当化仮説：Briñol & Petty, 2009）である。これらの内、活性化したカテゴリーに沿って他者の行動を解釈しても良いかという評価——主観的有用性——と概念的に近いものは (2) であると考えられる。この節では、これまでに考えと態度の一貫性を高めることが示されてきた操作のレビューを行う。

自分の考えに確信を感じた経験を思い出させると、考えと態度の一貫性が強まる。これを示したのは、Petty et al. (2002, Study 3) である。この操作では、経験想起によって直接確信を生起させていることになる。彼らは、大学に上級試験を導入することのメリットを説得的に述べた文章——上級試験の導入に肯定的な考えが生成される文章（以下、強い議論）——か、あまり説得的に述べられていない文章——上級試験の導入に否定的な考えが生成される文章（以下、弱い議論）——を読ませた後、文章を読んで考えたことを列挙させた。その後、上級試験の導入とは無関係な課題であると伝えた上で、自分の考えに確信を感じた経験か疑念を感じた経験を記述させ、確信を操作した。さらに、文章を読んで考えたことに伴う確信を一つ一つ評定させた後で、上級試験導入への賛否を尋ねた。実験の結果、次の3点が明らかにされた：自分の考えに確信を感じた経験を記述した参加者は、疑念を感じた経験を記述した参加者と比べて、(1) 文章を読んで考えたことについて確信を感じていた。加えて、(2) 強い議論に触れたときのほうが、弱い議論に触れたときよりも、上級試験への態度が好意的になるというパターンが強まっていた。さらに、(3) 自分の考えに確信を持っていた参加者で議論の質が態度に与える影響が強くなるというパターンは、説得的メッセージを読んで自分の考えを生成しやすい人——認知欲求の高い人——に限って見られ、メッセージを読んでもあまり自分の考えを生成しない人——認知欲求の低い人——では弱まったことから、このパターンが自分の考えに媒介されていることが示

唆された。Petty et al. (2002) が示したように、経験想起によって、確信は直接生起させることができる。

自分の考えに確信を感じた経験を思い出さなくても、確信と関連するジェスチャーによっても、考えと態度の一貫性は強まる。これは自分の考えの妥当性を評価する材料に、自分の身体が使われることがあるからだ。たとえば、頭の動き——頭を縦に動かす動き——は自分の考えに確信を生じさせる (Briñol & Petty, 2003)。Briñol & Petty (2003, Study 3) は、大学生を実験参加者とし、学生証の携帯を義務付けることのメリットを説得的に述べた文章——強い議論——か、あまり説得的に述べられていない文章——弱い議論——をヘッドホンで聞かせながら、頭を縦か横に動かすように求めた。その後、義務付けについての賛否を尋ね、説得的メッセージを聞いて考えたことを列挙させ、列挙した考え全体に感じる確信を評定させた。実験の結果、頭を縦に動かしていた時に、Petty et al. (2002) が得た (1) (2) (3) と概念的に等価な知見が得られた。さらに、(4) 頭の動きが議論の質と態度の関係を強める効果——Petty et al. (2002) の (2) と等価な結果——は文章を聞いて考えたことについての確信に媒介されていたことも示された。Briñol & Petty (2003) が示したこれらの結果は、頭の動きによって確信が生じ、これが自分の考えと態度の一貫性を高めることを示している。

自己妥当化仮説 (Briñol & Petty, 2009) のもとで、確信を生起させる操作として、経験想起 (Petty et al., 2002) と頭の動き (Briñol & Petty, 2003) が用いられ、実証的な支持があることを見てきた。本研究では、確信を生起させる変数としてこれらの変数を用い、確信が CA 効果を強めたり弱めたりするかを調べる。

## 本研究の概要

本研究の目的は、自己妥当化仮説 (Briñol & Petty, 2009) に基づいて、確信が CA 効果を調整するかを検討することである。CA 効果の生起を検討するためのターゲット課題として、ストーリーを参加者に聞かせ登場人物の性格を回答させる課題を用いる (e.g., Srull & Wyer, 1979)。

プライム課題中に特性カテゴリーのアクセシビリティを高めるために、敵意関連語の閾下呈示を行った。敵意関連語の閾下呈示によって、敵意カテゴリーのアクセシビリティが高まり、曖昧に描写されたストーリーの符号化が変化することが示されている (e.g., Bargh & Pietromonaco, 1982)。本研究では、敵意関連語を閾下呈示された参加者とされなかった参加者の両方に、同じ内容の曖昧なストーリーを聞かせ、回答された印象を比べることによって、CA 効果の生起を調べる。もし、敵意関連語を閾下呈示された参加者の方が、そ

うでない参加者よりも、登場人物を敵意的であると知覚していれば、CA 効果が生起していたと言える。

確信が CA 効果を調整するかを検討するために、研究 1 では、頭を縦か横に動かしたまま、ストーリーを聞かせた。研究 2 では、ストーリーの呈示後・登場人物の印象を回答する直前に、自信を感じた経験または自信を失った経験を思い出させることによって、確信を操作した。

本研究の概念的仮説は次のとおりである：確信の低い時——頭を横に動かした時や自信を失った経験を思い出した直後に比べて、確信の高い時——頭を縦に動かした時や自信を感じた経験を思い出した直後に CA 効果は顕著に見られるであろう。

## 研究 1

研究 1 の目的は、頭の動きによって生じた確信 (Briñol & Petty, 2003) が、CA 効果を調整するかを検討することである。そのために、語彙決定課題と印象形成課題を実施した。語彙決定課題では、敵意語を閾下呈示し敵意関連概念のアクセシビリティを高めるか、中立語を閾下呈示し敵意関連概念のアクセシビリティを高めなかった。続く、印象形成課題では、ストーリーをヘッドホンで呈示し、ストーリーが流れている間に、頭を縦か横に動かすように求めた。ストーリーが終わると、頭を動かすのを止め、調査票を用いてストーリー中の登場人物の印象を回答するように求めた。研究 1 の作業仮説は次のとおりである：ストーリーを聞きながら頭を縦に動かしていた参加者の中では、語彙決定課題中に敵意語を閾下呈示された場合のほうが、中立語を閾下呈示された場合よりも、登場人物に敵意的な印象を形成する——CA 効果が生じるであろう。一方、頭を横に動かしていた参加者では、CA 効果は弱まるであろう。

## 方法

**参加者** 首都大学東京の男子学部生 77 名が実験に参加した。77 名の参加者を、4 つの実験条件のいずれかにランダムに配置した。独立変数の 1 つ目は、閾下プライム (敵意語条件、中立語条件) であった。独立変数の 2 つ目はターゲット人物の情報を聞いている間の頭の動き (縦、横) であった。いずれも参加者間要因であった。

### 独立変数

1. 閾下プライムは語彙決定課題中に操作した。語彙決定課題では、閾下呈示されたターゲット語が「意味のある単語」か「意味のない単語」かを素早く判断するように求めた。語彙決定課題は 10 試行の練習と、30 試行の本番から構成されていた。各試行の構成は、

注視点 (+) を 1000 ミリ秒， 閾下プライム（敵意語条件：敵対・冷酷， 中立語条件：比例・点検）を 17 ミリ秒， マスク刺激（#####）を 225 ミリ秒ずつ順番に呈示した後， 参加者の反応があるまでターゲット語（e.g., 有意味語：くるま， 無意味語：とかき）を呈示し続ける， というものであった。したがって， 参加者は語彙決定を練習では 10 回， 本番では 30 回行った。ただし， 練習では， 閾下プライムは呈示されていなかった。敵意語条件の閾下プライムは森（2000）から選択した。これらの単語は， 敵意と関連していることが確かめられている（森, 2000）。 中立語条件の閾下プライムも森（2000）から選択した。これらの単語は， 感情価を持たないため， 快・不快感情を生起させる可能性は低い。また， 性格とも関連を持たないため， 特性概念を活性化させる可能性も低い。これらのことから， 敵意語条件との比較対象として好適であると考えられる。 語彙決定課題で用いた教示・刺激の呈示には Dell 社製デスクトップパソコン Optiplex 980 と 17 インチの CRT モニタを用いた。教示と刺激の制御には Inquist version 2.0 を用いた。

2. 頭の動きは印象形成課題の妨害という名目で操作した。印象形成課題のストーリーは 2 分程度の長さであり， ストーリーが流れている間， 参加者にはモニタに呈示された + マークに合わせて頭を動かすように求めた。頭を縦に動かす条件では， + マークは上下に， 横に動かす条件では左右にモニタを往復していた。このような， 参加者自身がジェスチャーとして頭を動かしているわけではない実験状況でも， 頭を縦に動かす動きが確信を高めることが示されている（Briñol & Petty, 2003）。

**従属変数** ターゲット人物の印象評定に用いた形容詞の内， 敵意と関連する特性語と， 友好に関連する語の平均得点を従属変数とした。その際， 友好に関連する語は逆転項目として扱い， 点数が高いほど， ターゲット人物の印象が敵意的になるように得点を変換した。得点を取りうる値は 1 から 7 点であった。

ターゲット人物の印象は， 24 個の性格特性を表す形容詞を用いて， 7 件法（1: 全く当てはまらない—7: 非常に当てはまる）で尋ねた。24 個の特性語には， 敵意と関連する特性語・友好と関連する語・敵意と関連しない否定的な特性語・敵意と関連しない肯定的な特性語の 4 タイプを設け， それぞれ次の 6 語を使用した：敵意と関連する特性語として「わがままな」「好戦的な」「きびしい」「意地悪な」「残酷な」「冷たい」， 友好と関連する特性語として「思いやりのある」「平和を好む」「おひとよしな」「やさしい」「情け深い」「あたたかい」， 敵意と関連しない否定的な特性語として「無責任な」「退屈な」「気の小さい」「下品な」「うぬぼれた」「頭の悪い」， 敵意と関連しない肯定的な特性語として「責任感のある」「おもしろい」「気の大きい」「上品な」「謙虚な」「頭の良い」。これらの 4 タイプの特性語は森（2000）を参考に選択した。

ストーリー中， ターゲット人物の行動は， ターゲット人物の特性に帰属することが可能

な一方で、状況要因に帰属することも可能なように描写されており、曖昧であった。たとえば、アパートの家賃を払わない、嘘をついて献血を断るといった行動を取るようターゲット人物は描写されていた (e.g., Srull & Wyer, 1979。本研究で用いたストーリーは付録参照)。

**操作チェック** 実験に参加した感想と、現在の気分を6件法(0:全く感じない—非常に強く感じる)で尋ねた。この内、現在の気分に関する10項目を操作チェックとして用いた。これら10項目の内、次の5つはポジティブな気分を意味するものであった:「幸せな」「楽しい」「リラックスした」「愉快的」「落ち着いた」。残りの5つはネガティブな気分を意味するものであった:「緊張した」「恐ろしい」「悲しい」「イライラした」「がっかりした」。

## 手続き

「発話の理解に関する研究」というカバーストーリーの下、参加者募集を行った。実験は一人ひとり個別に実施した。

まず、「単語を処理するスピードを計測する」という名目で、語彙決定課題を実施した。語彙決定課題中に、敵意に関連する語または中立的な単語を閾下呈示した。

語彙決定課題の後、「発話の理解に関する課題」という名目で、印象形成課題を行った。この課題では、ヘッドホンからストーリーを聞かせた。ヘッドホンからストーリーを聞いている間、参加者には頭を縦または、横に動かすように求めた。

ストーリーの呈示後、参加者に登場人物の印象と、実験中の気分を回答させた。その後、デブリーフィングを行い、実験を終了した。

## 結果

実験データの解析には、R version 3.1.2を用いた。回答に不備のない、76名のデータを分析対象とした。まず、予備分析として、従属変数の記述統計量を示し、操作チェックを行う。その後、本分析として、2要因参加者間の分散分析の結果を示す。

**従属変数の記述統計量** 敵意または友好に関連する特性語の評定値は、十分な信頼性を持つと考えられた ( $\alpha = .73$ )。これら12項目の平均値は5.28、標準偏差は0.57であった。従属変数の中点は4であるため、ターゲット人物はやや敵意的な印象を持たれていたことが示唆された。4つの実験条件の平均値・標準偏差・参加者数をTable 1に示した。

Table 1 ターゲット人物に知覚された敵意性の記述統計量

条件	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>N</i>
敵意語 x 縦	5.30	0.62	23
敵意語 x 横	5.61	0.50	14
中立語 x 縦	5.15	0.48	14
中立語 x 横	5.14	0.57	25
全体	5.28	0.57	76

**操作チェック** 実験中のネガティブな気分がターゲット人物に誤帰属され、形成された印象が否定的になった、という代替説明を排除するために、気分に関連する 10 語の平均得点 ( $M = 2.98, SD = 0.51, \alpha = .55$ ) を従属変数、閾下プライムと頭の動きを独立変数に、2 要因の分散分析を行った。その結果、いずれの主効果・交互作用も有意ではなかった ( $F_s < 2.42$ )。したがって、4 つの実験条件の間で、参加者の気分の違いがあったというデータは得られなかった。

**本分析** 敵意または友好に関連する特性語の平均値を従属変数、閾下プライム・頭の動きを独立変数に、2 要因参加者間分散分析を行った。その結果、閾下プライムの主効果のみが有意であった ( $F(1, 72) = 4.48, p < .04$ )。頭の動きの主効果および、仮説と最も関連のある閾下プライム x 頭の動きの交互作用効果は有意ではなかった ( $F_s < 1.52, p > .16$ )。条件ごとに見た従属変数の平均値と標準偏差を Figure 1 に示す。

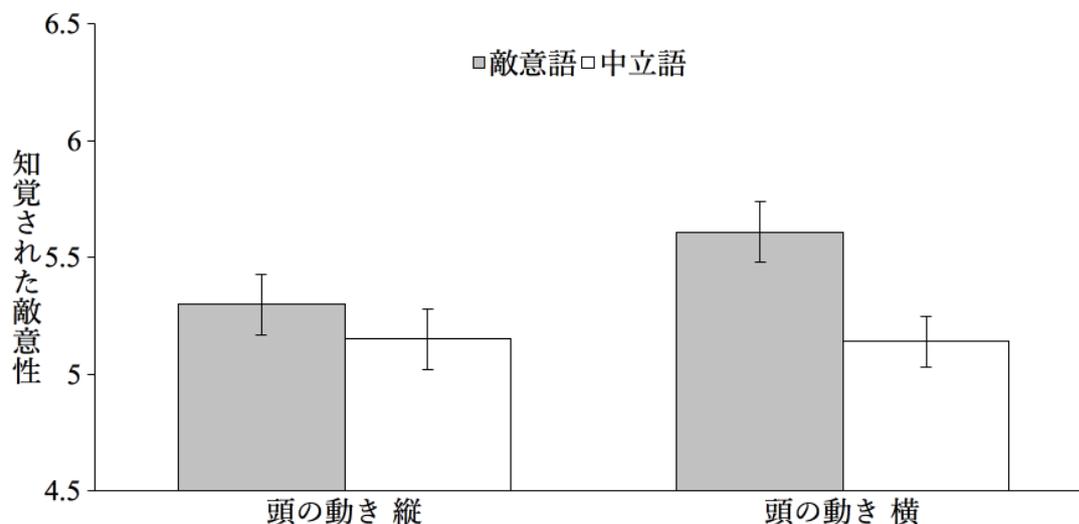


Figure 1. 閾下プライムと頭の動きが知覚された敵意性に与える影響. エラーバーは

標準誤差を表す。

閾下プライムの主効果は、敵意語条件 ( $M = 5.41, SD = 0.59$ ) の参加者の方が、中立語条件 ( $M = 5.14, SD = 0.53$ ) の参加者よりも、ターゲット人物を敵意的に評定していたことによるものであった。この結果は、本実験において、CA 効果が再現していたことを示唆している (e.g., Bargh & Pietromonaco, 1982)。

## 考察

研究 1 の目的は、頭の動きによって生じた確信が、CA 効果を調整するかを検討することであった。そのために、語彙決定課題中に敵意語か中立語を閾下呈示した後に、頭を縦か横に動かしたままストーリーを聞かせ、登場人物の印象を回答させた (Bargh & Pietromonaco, 1982)。頭を縦に動かす動きが確信を高め、頭を横に動かす動きが確信を低めるとすれば、頭を縦に動かしていたときのほうが、横に動かしていたときよりも、CA 効果は顕著に見られると予測される。しかし予測に反して、閾下プライムと頭の動きの交互作用は有意ではなかった。

実験後のデブリーフィングにおいて、参加者から「ストーリーの呈示ペースが早いと感じた」という感想が得られた。説得メッセージを用いた研究では、メッセージの呈示ペースを早めることが考えの生成を阻害すること (Briñol & Petty, 2003) と、確信が考えと判断の関係を強めるためには考えが生成されている必要があること (Briñol & Petty, 2003; Petty et al., 2002) が示されている。研究 1 では、ストーリーの呈示ペースはおよそ 600 文字/2 分であり、ストーリーの呈示ペースが早すぎたというよりは、ストーリーを聞きながら頭を動かしていたことで、参加者の認知資源が制約され思考の生成が阻害されてしまったのだろう。つまり、研究 1 の実験状況は確信によって CA 効果が調整されにくいものであった可能性が考えられる。

研究 2 では、思考の生成を妨げないように確信の操作を変更して、研究 1 の概念的追試を行う。具体的には、頭を動かしたままストーリーを聞かせて確信を操作するのではなく、ストーリーを聞かせた直後に経験想起によって確信を直接生起させる。この変更によって、ストーリーを聞いている間の参加者の負担が軽減され、確信が CA 効果を調整しやすい実験状況に近づくであろう。

## 研究 2

研究 2 の目的は、経験想起によって生じた確信が、CA 効果を調整するかを検討するこ

とである。研究1との手続きの違いは次の3点である：(a) ストーリーを聞いている間に頭を動かしていない。(b) ストーリーを聞いた直後、印象を回答させる直前に、経験想起を行っている。(c) 従属変数に11件法が用いられている。

研究2の作業仮説は次のとおりである：自信を感じた経験を思い出させた参加者の中では、語彙決定課題中に敵意語を閾下呈示された場合のほうが、中立語を閾下呈示された場合よりも、登場人物に敵意的な印象を形成する——CA効果が生じるであろう。一方、自信を失った経験を思い出させた参加者では、CA効果は弱まるであろう。

## 方法

**参加者** 首都大学東京の男子学部生48名が実験に参加した。48名の参加者を、4つの実験条件のいずれかにランダムに配置した。独立変数の1つ目は、閾下プライム（敵意語条件、中立語条件）であった。独立変数の2つ目は、経験想起の内容（自信条件、疑念条件）であった。いずれも参加者間要因であった。

### 独立変数

1. 閾下プライムの操作は研究1と同様である。
2. 経験想起の内容は文章を書く課題という名目で操作した。自信を感じた経験を思い出させた参加者には「大学生になってから経験した、自分の考えや行動に自信を感じた瞬間・ワンシーンを教えてください」、自信を失った経験を思い出させた参加者には「大学生になってから経験した、自分の考えや行動に自信を失った瞬間・ワンシーンを教えてください」と依頼した。さらに、いずれの参加者にも、続けて「その瞬間・ワンシーンでどんな気持ちになったのか、どんなことを感じたのかよく思い出しながら、ご記入下さい」と教示を与えた。研究2のように、ストーリーを呈示してから印象を答えるまでに遅延を設けると、CA効果は強まる（Higgins et al., 1977; Srull & Wyer, 1980）。また、このような経験想起によって、確信が変化することが示されている（Petty et al., 2002）。

**従属変数** ターゲット人物の印象評定に用いた形容詞の内、敵意と関連する特性語と、友好に関連する語の平均得点を従属変数とした。その際、友好に関連する語は逆転項目として扱い、点数が高いほど、ターゲット人物の印象が敵意的になるように得点を変換した。得点が取りうる値は0から10点である。評定に用いた項目は研究1と同様である。

### 操作チェック

1. 経験想起の容易さは次の項目で測定した：「文章を書く課題についてお伺いします。文章を書く課題がどれくらい難しく感じたかを、数字に○を付けてお答え下さい」。9件法（1: 非常に簡単だった—9: 非常に難しかった）で回答させた。この質問への回答は、経験想起の内容によって課題の容易さが異なり、それによってCA効果が調整されるという

媒介プロセスを調べるために使用した。

2. 確信は次の項目で測定した：「文章を聞く課題についてお伺いします。お答えいただいた山田君の印象について、どれくらい自信があるか数字に○を付けてお答えください」。9件法（1: 全く自信がない—9: 非常に自信がある）で回答させた。この項目は経験想起の内容によって確信が生起しているかを調べるために使用した。経験想起による確信の操作が妥当であるとすれば、自信条件のほうが疑念条件よりも、評定値が高い——形成した印象に確信を持っていると考えられる。

3. 精緻化は次の項目で測定した：「文章を聞く課題についてお伺いします。お答えいただいた山田君の印象について、どんな風に回答したかを数字に○を付けてお答えください」。9件法（1: 直感に従った—9: 慎重に考えた）で回答させた。確信が思考と判断の関係を調整するためには、何らかの思考が生成されている必要がある（Briñol & Petty, 2003; Petty et al., 2002）。そのため、精緻化の高い参加者でのみ、経験想起の内容がCA効果を調整すると予測される。

4. 阿部・今野（2007）の状態自尊心尺度（9項目、1: あてはまらない—5: あてはまる）の平均得点を経験想起の操作チェックに用いた。この尺度で測定された状態自尊心は自尊心を高める操作によって高まり、脅かす操作によって低まることが確かめられている（阿部・今野, 2007）。経験想起による操作が妥当であるとすれば、自信条件のほうが疑念条件よりも、評定値が高い——自尊心が高まった状態になっていると考えられる。

5. 気分（10項目、0: 全く感じない—5: 非常に強く感じる）の平均得点を感情の誤帰属による代替説明を排除するための操作チェックに用いた。気分の測定に用いた項目は研究1と同様である。

## 手続き

「言語の理解に関する研究」というカバーストーリーの下、参加者募集を行った。実験は一人ひとり個別に実施した。

まず、「文章を読む課題」という名目で、語彙決定課題を実施した。語彙決定課題中に、敵意に関連する語または中立的な単語を闕下呈示した。

語彙決定課題の後、「文章を聞く課題」という名目で、ストーリーを呈示した。ストーリーはヘッドホンから呈示された。参加者には、ストーリーを聞いて登場人物の印象を考えるよう、教示した。

次に、「文章を書く課題」という名目で、「大学生活に関する文章」を書くよう求めた。文章のテーマは「自分の考え・行動に自信を持った瞬間・ワンシーン」または「自分の考え・行動に自信を失った瞬間・ワンシーン」のいずれかであった。どちらの条件でも、

「その瞬間・ワンシーンでどんな気持ちになったのか、どんなことを感じたのかよく思い出しながら」文章を書くよう教示を与えた。

さらに、登場人物の印象と、経験想起の容易さ、確信、精緻化、状態自尊心、実験中の気分を回答させた。最後に、デブリーフィングを行い、実験を終了した。

## 結果

実験データの解析には、R version 3.1.2 を用いた。回答に不備のあった参加者 1 名（自信 X 中立条件）、経験想起の操作に失敗した参加者 1 名（自信 X 中立条件）、印象評定値の回答が平均から  $-3SD$  以上離れていた参加者 1 名（自信 X 中立条件）を除き、45 名のデータセットを分析に用いた。

まず、計測した変数の記述統計量を示し、経験想起の操作チェックを行う。その後、本分析として、2 要因参加者間の分散分析の結果と、精緻化を用いた一般線形モデルによる分析の結果を示す。

**計測した変数の記述統計量** 従属変数と操作チェックに用いた変数の記述統計量を Table 2 に示した。研究 2 の従属変数である、敵意または友好に関連する特性語の評定値は、十分な信頼性を持つと考えられた ( $\alpha = .75$ )。これら 12 項目の平均値は 6.34、標準偏差は 0.80 であった。従属変数の中点は 5 であるため、ターゲット人物はやや敵意的な印象を持たれていたことが示唆された。また、敵意・友好に関連する特性語の評定値の度数分布を Figure 2 に示した。ただし、Figure 2 の描写には印象評定値の回答が平均から  $-3SD$  以上離れていた参加者 1 名（自信 X 中立条件）を含んだデータセット ( $N = 46$ ) が使用されている点に注意せよ。

Table 2 記述統計量 ( $N = 45$ )

	<i>M</i>	<i>SD</i>
知覚された敵意性 (0—10, $\alpha = .75$ )	6.34	0.80
経験想起の容易さ (1—9)	5.07	2.23
確信度 (1—9)	5.56	1.49
精緻化 (1—9)	4.16	2.24
状態自尊心 (1—6, $\alpha = .90$ )	3.40	0.87
気分 (0—5, $\alpha = .61$ )	3.19	0.55

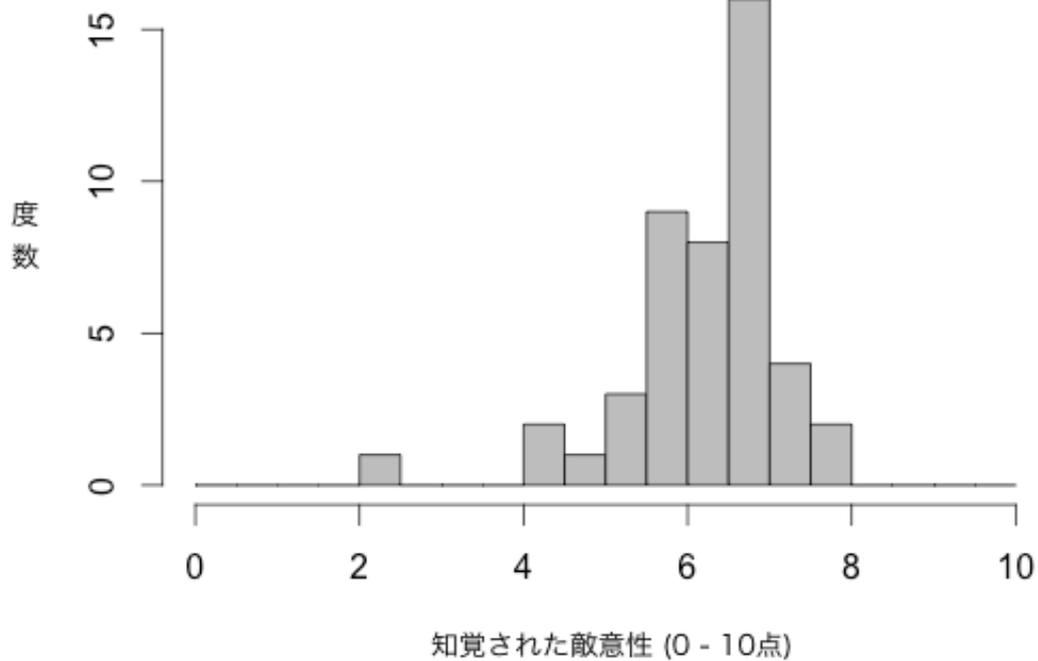


Figure 2. ターゲットに知覚された敵意性の度数分布図. 外れ値の様子が分かるように, 分析に用いたデータセット ( $N=45$ ) に外れ値の 1 名を加えた 46 名のデータを用いて度数分布図を描写した。

**経験想起の操作チェック** 経験想起の内容ごとに, 経験想起の操作の妥当性を確かめるための変数の記述統計量を Table3 に示した。

Table 3 経験想起の内容が諸変数に与える影響

	自信		疑念	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
経験想起に要した時間 (秒)	129.67	40.31	175.05	76.57
経験想起の容易さ (1—9)	5.27	2.27	4.87	2.22
確信度 (1—9)	5.50	1.41	5.61	1.59
精緻化 (1—9)	3.91	2.14	4.39	2.35
状態自尊心 (1—6, $\alpha = .90$ )	3.34	0.93	3.45	0.82
気分 (0—5, $\alpha = .61$ )	3.17	0.51	3.22	0.60

note. 経験想起に要した時間のみ有意差あり ( $t(33.64) = -2.50, p = .02$ )

文章を書く課題ごとに変数に差があるかを検討するために、*t*検定を行った。その結果、経験想起に要した時間にのみ有意な差が見出され、疑念条件のほうが自信条件よりも、経験想起に要した時間が長かった ( $t(33.64) = -2.50, p = .02$ )。その他の変数では、有意な差は見られなかった ( $\text{all } t_s < |0.72|, \text{all } p_s > .55$ )。

経験想起の妥当性を確かめるために用いた、確信と状態自尊心に有意な差が見られなかった。このことから、操作の妥当性は確かめられなかった。

**本分析** ターゲット人物に知覚された敵意性を従属変数に、閾下プライム（敵意語 vs 中立語）X 経験想起の内容（自信 vs 疑念）の2要因参加者間分散分析を行った。その結果、有意な効果は観察されなかった ( $\text{all } F_s < 2.01, \text{all } p_s > .16$ )。したがって、経験想起によって生じた確信が敵意プライムの効果を調整するという仮説を支持するデータは得られなかった。条件ごとに見た従属変数の平均値・標準偏差を Table 4 に示す。

Table 4 閾下プライムと経験想起が知覚された敵意性に与える影響

条件	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>N</i>
敵意語 x 自信	6.13	0.75	13
中立語 x 自信	6.75	0.49	9
敵意語 x 疑念	6.32	0.98	11
中立語 x 疑念	6.26	0.83	12

精緻化が CA 効果と確信の関係を調整しているかを検討するために、一般線形モデルによる分析を行った。まず、閾下プライム（中立語条件 = 0, 敵意語条件 = 1）と経験想起の内容（自信条件 = 0, 疑念条件 = 1）をダミー変数、精緻化（1: 直感に従った-9: 慎重に考えた）を標準化した。そして、ターゲットに知覚された敵意性を従属変数に、閾下プライム X 経験想起の内容 X 精緻化の一般線形モデルを立て、分散分析を行った。その結果、有意な効果は観察されなかった ( $\text{all } F_s < 2.42, \text{all } p_s > .13$ )。

## 考察

研究2の目的は、経験想起によって生じた確信が、CA 効果を調整するかを検討することであった。そのために、語彙決定課題中に敵意語か中立語を閾下呈示した後に、ストーリーを聞かせ、自分の考え・行動に自信を感じた瞬間か失った瞬間を記述させてから、登場人物の印象を回答させた。自信を感じた経験を想起することが確信を高め、自信を失った経験を想起することが確信を低めるとすれば、自信を感じた経験を想起した参加者の方

が失った経験を想起した参加者よりも、CA 効果が顕著に見られると予測される。しかし予測に反して、閾下プライムと経験想起の内容の交互作用は有意ではなかった。

興味深いことに、研究 1 で見られた閾下プライムの主効果が、研究 2 では見られなかった。これまで、ターゲット人物の曖昧な行動を呈示してから印象を回答するまでに遅延を設けると、CA 効果は強まるという知見が報告されてきた (Higgins et al., 1977; Srull & Wyer, 1980) ため、この結果は予測していなかったものである。CA 効果の研究では、ストーリーの呈示と印象を回答するまでに遅延課題を設ける場合には、容易な課題——たとえば、制限時間中に 853 から 7 を引き続ける計算課題 (Higgins et al., 1985) ——を用いることが多い。このような計算課題に比べて、経験想起は難しい課題だったのかもしれない。

もしこの解釈が正しく、遅延課題の容易さが CA 効果の生起に関連しているとすれば、経験想起に感じた容易さが CA 効果を調整している可能性が考えられる。そこで、研究 2 の事後分析として、経験想起に伴う容易さを投入した上で、閾下プライムと経験想起の内容の相互作用について調べた。事後分析の作業仮説は次のとおりである：自信を感じた経験を思い出させた参加者の中では、語彙決定課題中に敵意語を閾下呈示された場合のほうが、中立語を閾下呈示された場合よりも、登場人物に敵意的な印象を形成する——CA 効果が生じるであろう。一方、自信を失った経験を思い出させた参加者では、CA 効果は弱まるであろう。この傾向は、経験想起を容易に感じた参加者で見られるであろう。

## 事後分析

**データセット** 研究 2 で分析に用いたデータセット ( $N=45$ ) を使った。実験データの解析には、R version 3.1.2 を用いた。

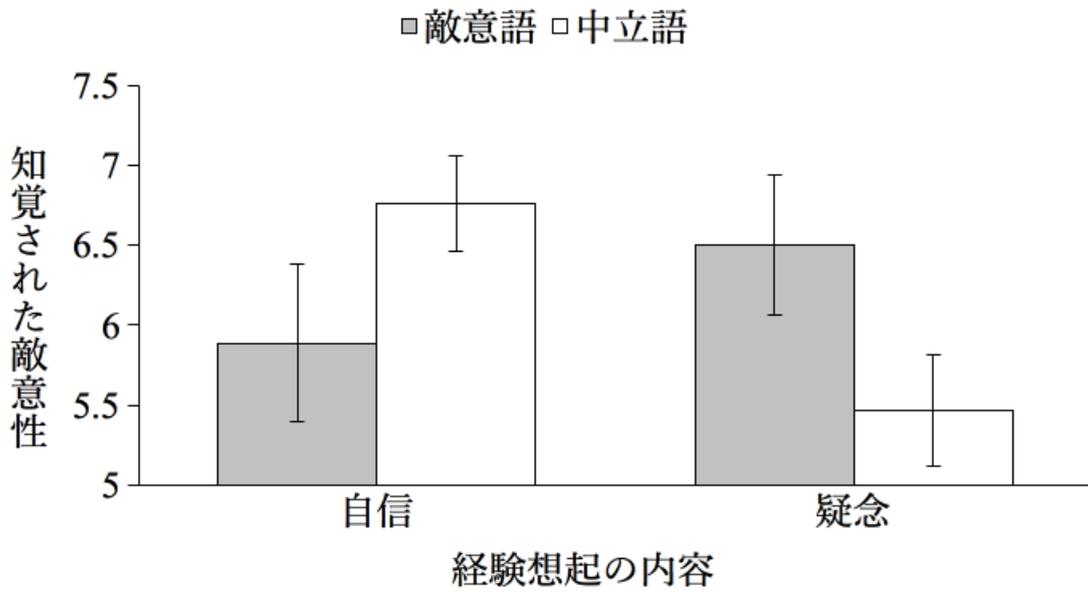
**結果** 分析にあたって、閾下プライム (中立語条件 = 0, 敵意語条件 = 1) と経験想起の内容 (自信条件 = 0, 疑念条件 = 1) をダミー変数、経験想起の容易さ (1: 非常に簡単だった—9: 非常に難しかった:  $M=5.07, SD=2.23$ ) を標準化した。知覚された敵意性を従属変数 ( $M=6.34, SD=0.80, \alpha=.75$ ) に、閾下プライム X 経験想起の内容 X 容易さの一般線形モデルを立て、分散分析を行った。その結果、予測通り、閾下プライム X 経験想起の内容 X 容易さの 3 要因の交互作用のみが有意であった ( $F(1, 37) = 5.90, p = .02$ )。

閾下プライム X 経験想起の内容 X 容易さの 3 要因の交互作用について詳しく検討するため、経験想起の容易さの  $\pm 1SD$  値を計算し、単純傾斜検定を行った。その結果、経験想起を容易だと感じた参加者——経験想起の容易さ  $-1SD$  値——では、閾下プライム X 経験想起の内容の 2 要因の交互作用の係数は有意であった ( $B=1.90, SE=0.66, t(37) = 2.29, p < .01$ )。一方、経験想起を困難だと感じた参加者——経験想起の容易さ  $+1SD$  値——では有意ではなかった ( $B=-0.44, SE=0.69, t(37) = -0.63, p = .53$ )。経験想起の容易さ  $\pm 1SD$  値

ごとに見た， 閾下プライム X 経験想起の内容の交互作用のパターンを Figure 3 に示した。

経験想起を容易だと感じた参加者——経験想起の容易さ-1SD 値——で見られた閾下プライム X 経験想起の内容の交互作用について詳しく調べるために， 経験想起の内容ごとに単純傾斜検定を行った。その結果， 自信を感じた経験を想起した参加者では， 閾下プライムの主効果は有意に近い負の係数を示した ( $B = -0.86, SE = 0.49, t(37) = -1.77, p = .09$ )。一方， 自信を失った経験を想起した参加者では， 閾下プライムの主効果は有意な正の係数を示した ( $B = 1.03, SE = 0.44, t(37) = 2.34, p = .02$ )。つまり， 自信を失った経験を想起した参加者において CA 効果が顕著に観察された。したがって， 作業仮説とは逆のパターンが得られた。

経験想起の容易さ-1SD 値における閾下プライム X 経験想起の内容の交互作用



経験想起の容易さ+1SD 値における閾下プライム X 経験想起の内容の交互作用  
(非有意)

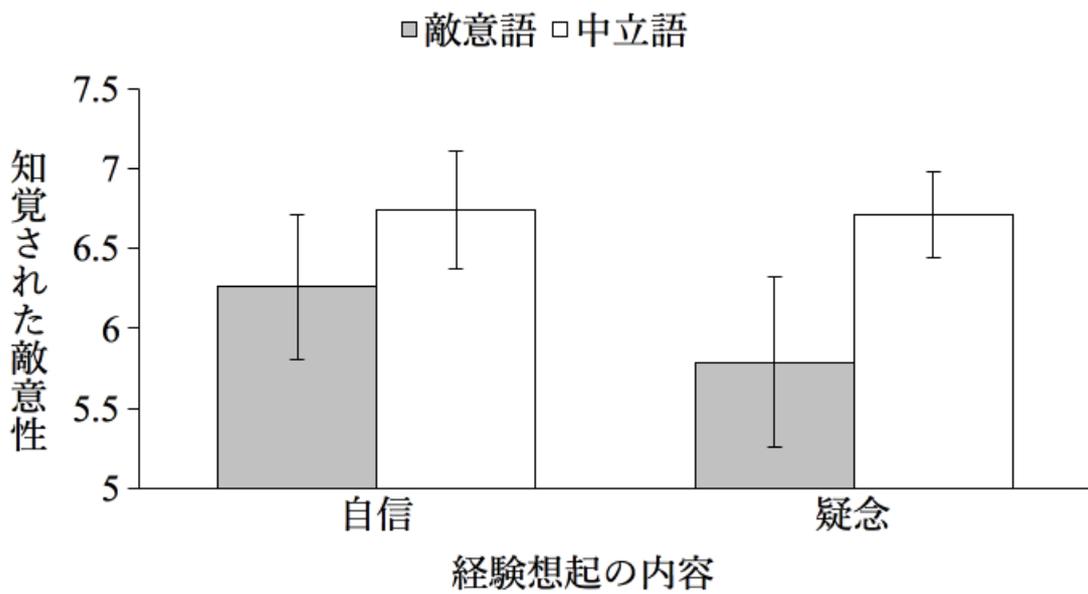


Figure 3 経験想起の容易さ±1SD 値ごとにみた閾下プライム X 経験想起の内容の交互作用. 上図は容易さ-1SD 値, 下図は+1SD 値である。エラーバーは標準誤差を示す。

**考察** 事後分析では、経験想起が遅延課題としては難しすぎた可能性を踏まえて、経験想起が容易だと感じた参加者——手続きに遅延課題を含んだ先行研究（e.g., Higgins et al., 1985）と実験状況に近い参加者——で、確信と CA 効果がどのように相互作用するのかを調べることを目的とした。作業仮説は次のとおりであった：自信を感じた経験を思い出させた参加者の中では、語彙決定課題中に敵意語を閾下呈示された場合のほうが、中立語を閾下呈示された場合よりも、登場人物に敵意的な印象を形成する——CA 効果が生じるであろう。一方、自信を失った経験を思い出させた参加者では、CA 効果は弱まるであろう。この傾向は、経験想起を容易に感じた参加者で見られるであろう。

分析の結果、経験想起を容易に感じた参加者の内、自信を感じた経験を思い出させた参加者ではなく、自信を失った経験を思い出させた参加者において、CA 効果が観察された（Figure 3 上図参照）。この結果は、事後分析の作業仮説とは矛盾するものであった。

## サマリー

研究 2 の目的は、ストーリーを聞いている間に頭を動かすことで確信を操作するのではなく、ストーリーを聞いた直後・印象を回答させる直前に経験想起によって確信を操作することによって、ストーリーを聞いている間に考えが生成されやすい状況——確信が考えと判断の一貫性を高めるための必要条件を満足させた状況——で、確信と CA 効果の関係を調べることであった。少なくとも経験想起を容易に感じた参加者では、自信を失った経験を想起した後に CA 効果が強まる可能性が示唆された。

しかし、研究 2 の結果の解釈には慎重にならなければならない。研究 2 の操作チェックにおいて、経験想起の内容に応じて、状態自尊心と確信に変化が見られなかったためである。もし経験想起の内容が確信の操作として妥当であるとすれば、自信を感じた経験を思い出した参加者は、失った経験を思い出した参加者に比べて、状態自尊心と確信がそれぞれ高くなっていると予測されていた。このことから、経験想起の内容によって、確信が変化していたかが明らかではなく、自信を失った経験を思い出した後に CA 効果が観察されたからといって、確信を失った時に CA 効果が強まるとは必ずしも言えない。

## 総合考察

本研究の目的は、確信の伴った考えは判断に影響を与えやすいという仮説（自己妥当化仮説：Briñol & Petty, 2009）に基づいて、確信が CA 効果を強めたり弱めたりするかを直接調べることであった。そのために、プライム課題中に特性語を閾下呈示し、ターゲット課題として印象形成課題を行った（Bargh & Pietromonaco, 1982）。

研究1では、頭を縦か横に動かしたままストーリーを聞かせ、確信を操作した。実験の結果、CA効果はされたものの、頭の動きによってCA効果の大きさに違いは見られなかった（Figure 1 参照）。この結果から、ストーリーを聞かせながら頭を動かすように求めたことによって、ストーリーを聞いている間に思考の生成が阻害され、確信がCA効果を調整するための必要条件——活性化したカテゴリーに沿って考えが生成されていること——を満たしていなかった可能性が考えられた。

研究2では、ストーリーを聞かせた直後・印象を回答する直前に、自信を感じた経験が失った経験を想起させることによって、思考の生成を阻害することなく、確信を操作した。実験の結果、経験想起を容易だと感じた参加者に限って、自信を感じた経験を想起した参加者ではなく、自信を失った経験を想起した参加者においてCA効果が観察された（研究2事後分析：Figure 3 上図参照）。ただし、確信の操作として経験想起の内容による操作が妥当でだったかは明らかではなく、確信がなくなったときにCA効果が強まるとは必ずしも言えないと考えられた。

本研究で得られた結論は次のとおりである：2つの研究を通じて、本研究の概念的仮説——確信が、活性化したカテゴリーに沿って他者の行動を解釈しても良いかという評価に影響を与え、CA効果を調整する——を支持するデータは得られなかった。

## 貢献点

特性語の閾下呈示によってCA効果を示すことは、CA効果が無意識に生じることを最も強く示す結果であるため、重要である。日本において、特性語の閾下呈示によって、ストーリーの解釈が変わるというCA効果（Bargh & Pietromonaco, 1982; Higgins et al., 1977; Srull & Wyer, 1979）の検出を試みた研究をTable 5に示す。これらの研究の問題点として、（1）ほとんど同じ手続き——注視点の右か左に特性語を50ミリ秒間呈示する（以下、池上・川口（1989）の方法）——を用いて特性語の閾下呈示を行っているにも関わらず、CA効果が生起するとは限らないこと（大平, 1994; 篠崎・藤島, 2007）と、（2）池上・川口の方法では参加者の一部に特性語が見えることがあること（唐牛・楠見, 2009）が挙げられる。特性語が見えた参加者ではCA効果が弱まることと（唐牛・楠見, 2009）、呈示された特性語の影響に気づくとCA効果とは拮抗する方向へ修正が働くこと（e.g., Strack & Schwarz, 1993）から、特性語が見えることはCA効果の検出を難しくしてしまう要因の1つである。

池上・川口（1989）の方法で特性語が見えてしまうことがある原因は、50ミリ秒の呈示時間では、特性語を中心窩で捉えることができれば、単語を読み取ることができるためである。更に加えて、注視点の左右に特性語を呈示するという方法は、注視点と特性語の間

にどれくらい距離を設けるかを定めるだけでなく、参加者とモニタの距離も統制する必要もあり、実験状況の構築が難しい。これらの理由から、特性語の閾下呈示による CA 効果の検出が難しいのだと考えられる。

本研究で用いた注視点に続けて特性語を 17 ミリ秒間呈示する方法（研究 1 手続き参照）は、(1) 注視点と特性語の距離の調整に加えて (2) 参加者とモニタの距離の調整も不要であり、池上・川口（1989）の方法と比べて実験状況の構築が容易である。また、17 ミリ秒の呈示時間は知覚閾下を下回っているため、(3) 参加者に単語が読み取られてしまう可能性が低く、CA 効果を検出するためのノイズが入り込みにくい。これらの点から、本研究で用いた手続きは、池上・川口（1989）の方法を改善している。今後、CA 効果の研究を行う際に有用な研究手法を確立したといえるだろう。

Table 5 特性語の閾下呈示によって CA 効果の検出を試みた日本国内の研究

研究	N	実験デザイン	1セルあたりのN
池上・川口（1989, 研究2）	20	<b>2（ブライム課題に含まれる特性語の割合：敵意語 20% vs 80%）</b> X2（評定語と活性化したカテゴリの関連：あり vs なし） X2（評定語の感情価：ポジティブ vs ネガティブ）	10
池上・川口（1989, 研究4）	20	<b>2（ブライム課題に含まれる特性語の割合：友好語 20% vs 80%）</b> X2（評定語と活性化したカテゴリの関連：あり vs なし） X2（評定語の感情価：ポジティブ vs ネガティブ）	10
唐牛・楠見（2009）	50	<b>2（ブライム課題に含まれる特性語：依存関連語 vs 中立語）</b> X2（ターゲット人物の性別：男 vs 女）	10-15
森（2000, 研究1; 森・坂元, 1997）	72	<b>3（ブライム課題に含まれる特性語：敵意 vs 友好 vs 中立）</b> X2（特性語の呈示方法：閾上 vs 閾下） X2（ストーリーのセット）	ランダム割当のため不明 （期待値 = 6）
森（2000, 研究4; 森, 1997）	48	<b>2（ブライム課題に含まれる特性語：依存関連語 vs 中立語）</b> X3（ターゲット人物の性別：男 vs 女 vs 手がかりなし） X2（特性語の呈示方法：閾上 vs 閾下） X2（評定語と活性化したカテゴリの関連：あり vs なし） X2（評定語の感情価：ポジティブ vs ネガティブ）	4
大平（1994）	32	<b>2（ブライム課題に含まれる特性語：敵意語 vs 中立語）</b> X2（生理的覚醒：高 vs 低）	ランダム割当のため不明 （期待値 = 8）
篠崎・藤島（2007）	41	<b>3（ブライム課題に含まれる特性語：A型的特性 vs B型的特性 vs 中立）</b> X2（血液性格診断に対する信念：高 vs 低）	不明
八木下・山崎（2010）	30	<b>2（ブライム課題に含まれる特性語：おたく関連語 vs 中立）</b>	15
本研究 研究1	76	<b>2（ブライム課題に含まれる特性語：敵意語 vs 中立語）</b> X2（頭の動き：縦 vs 横）	14-25
本研究 研究2	45	<b>2（ブライム課題に含まれる特性語：敵意語 vs 中立語）</b> X2（経験想起の内容：自信を感じた経験 vs 失った経験）	9-13

note. 実験デザインの列に含まれる**ボールド**は参加者間要因を表す。

## 引用文献

- 阿部 美帆・今野 裕之 (2007) . 状態自尊感情尺度の開発. *パーソナリティ研究*, **16**, 36–46.  
<http://doi.org/10.2132/personality.16.36>
- Bargh, J. A., & Pietromonaco, P. (1982) . Automatic information processing and social perception: The influence of trait information presented outside of conscious awareness on impression formation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 437–449.  
<http://doi.org/10.1037/0022-3514.43.3.437>
- Briñol, P., & Petty, R. E. (2003) . Overt head movements and persuasion: a self-validation analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **84**, 1123–1139.  
<http://doi.org/10.1037/0022-3514.84.6.1123>
- Briñol, P., & Petty, R. E. (2009) . Persuasion: Insights from the Self-Validation Hypothesis. In M. P. Zanna (Ed.) , *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol. 41. New York: Academic Press. pp. 69–118. [http://doi.org/10.1016/S0065-2601\(08\)00402-4](http://doi.org/10.1016/S0065-2601(08)00402-4)
- DeCoster, J., & Claypool, H. M. (2004) . A Meta-Analysis of Priming Effects on Impression Formation Supporting a General Model of Informational Biases. *Personality and Social Psychology Review*, **8**, 2–27. [http://doi.org/10.1207/S15327957PSPR0801\\_1](http://doi.org/10.1207/S15327957PSPR0801_1)
- Greifeneder, R., & Bless, H. (2010) . The fate of activated information in impression formation: fluency of concept activation moderates the emergence of assimilation versus contrast. *British Journal of Social Psychology*, **49**, 405–414. <http://doi.org/10.1348/014466609X479699>
- Gross, S. R., Holtz, R., & Miller, N. (1995) . Attitude Certainty. In R. E. Petty & J. A. Krosnick (Eds.) , *Attitude strength: Antecedents and consequences*. New Jersey: Erlbaum. pp. 215–245.
- Higgins, E. T. (1996) . Knowledge activation: Accessibility, applicability, and salience. In E. T. Higgins & A. W. Kruglanski (Eds.) , *Social psychology: Handbook of basic principles*. New York; Guilford Press. pp. 133–168.
- Higgins, E. T., Bargh, J. A., & Lombardi, W. J. (1985) . Nature of priming effects on categorization. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, **2**, 59–69. <http://doi.org/10.1037/0278-7393.11.1.59>
- Higgins, E. T., Rholes, W. S., & Jones, C. R. (1977) . Category accessibility and impression formation. *Journal of Experimental Social Psychology*, **13**, 141–154.  
[http://doi.org/10.1016/S0022-1031\(77\)80007-3](http://doi.org/10.1016/S0022-1031(77)80007-3)

- 池上 知子・川口 潤 (1989) . 敵意語・友好語の意識的・無意識的処理が他者のパーソナリティ評価に及ぼす効果. *心理学研究*, **60**, 38–44.  
<http://doi.org/http://doi.org/10.4992/jjpsy.60.38>
- Inquisit 2.0.61004.3 [Computer software] (2006) . Seattle, WA: Millisecond Software.
- 唐牛 祐輔・楠見 孝 (2009) . 潜在的ジェンダーステレオタイプ知識と対人印象判断の関係. *認知心理学研究*, **6**, 155–164. <http://doi.org/http://doi.org/10.5265/jcogpsy.6.155>
- 小柳恭治・石川信一・大久保幸郎・石井栄助 (1960) . 日本語三音節名詞の熟知価. *心理学研究*, **30**, 357–365. <http://doi.org/10.4992/jjpsy.30.357>
- Loersch, C., & Payne, B. K. (2011) . The Situated Inference Model: An Integrative Account of the Effects of Primes on Perception, Behavior, and Motivation. *Perspectives on Psychological Science*, **6**, 234–252. <http://doi.org/10.1177/1745691611406921>
- 森 津太子 (1997) . 対人判断における社会的カテゴリー適用可能性の効果とその個人差. *性格心理学研究*, **5**, 27–37.
- 森 津太子 (2000) . 対人認知における文脈効果—生起メカニズムと調整要因—. 風間書房.  
<http://doi.org/10.11501/3159148>
- 森 津太子・坂元 章 (1997) . 特性関連語の閾下・閾上呈示が対人知覚に及ぼす効果. *心理学研究*, **68**, 371–378. <http://doi.org/http://doi.org/10.4992/jjpsy.68.371>
- 大平 英樹 (1994) . 敵意的単語の無意識的認知処理と生理的覚醒が人物印象評定に及ぼす効果. *心理学研究*, **65**, 138–143. <http://doi.org/10.4992/jjpsy.65.138>
- Petty, R. E., Briñol, P., & Tormala, Z. L. (2002) . Thought confidence as a determinant of persuasion: the self-validation hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 722–741. <http://doi.org/10.1037/0022-3514.82.5.722>
- R Core Team (2014) . R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria.
- 篠崎 博美・藤島 喜嗣 (2007) . 血液型ステレオタイプの活性化が選択的情報使用と印象形成に及ぼす影響. *昭和女子大学生生活心理研究所紀要*, **10**, 99–107.
- Strull, T. K., & Wyer, R. S. (1979) . The role of category accessibility in the interpretation of information about persons: Some determinants and implications. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 1660–1672. <http://doi.org/10.1037/0022-3514.37.10.1660>
- Strull, T. K., & Wyer, R. S. (1980) . Category accessibility and social perception: Some implications for the study of person memory and interpersonal judgments. *Journal of Personality and Social Psychology*, **38**, 841–856. <http://doi.org/10.1037/0022-3514.38.6.841>
- Strack, F., & Schwarz, N. (1993) . Awareness of the influence as a determinant of assimilation

versus contrast. *European Journal of Social Psychology*, **23**, 53–62.

<http://10.1002/ejsp.2420230105>

Tetlock, P. E., & Kim, J. I. (1987). Accountability and judgment processes in a personality prediction task. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 700–709.

<http://doi.org/10.1037/0022-3514.52.4.700>

Thompson, E. P., Roman, R. J., Moskowitz, G. B., Chaiken, S., & Bargh, J. A. (1994). Accuracy motivation attenuates covert priming: The systematic reprocessing of social information.

*Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 474–489. <http://dx.doi.org/10.1037/0022-3514.66.3.474>

八木下 晶子・山崎 瑞紀 (2010) . 閾下プライミング効果の実験 – 「おたく」 ステレオタイプを用いて – . 東京都市大学環境情報学部情報メディアセンタージャーナル, **11**, 131–133.

### 付録——印象形成課題で用いたストーリー（研究1・2で使用）——

先日、私は高校時代の友達の子田くんとぼったり出会った。久しぶりだったので、次の休日に私は彼のアパートを訪ねることにした。私が子田くんのアパートに行くと、まもなく新聞の集金屋がやってきてドアをノックする音がした。子田くんはその集金屋に今月分の代金を払っていた。私と子田くんはしばらく話をし、昼ごはんを食べた。彼は私に、「家主が修繕してくれるまで家賃は払わないつもりだ。」といった。家の中にずっといても仕方がないので、私の車で、子田くんとドライブに出かけた。私たちは、街から1時間ほどのところにある、植物園まで車を走らせた。植物園へ行く途中、車の修理工場に寄った。そこで子田くんは「その日のうちに修理ができなければ、他の店に持っていくから。」と言った。休日だったので、植物園は家族連れが多かった。私たちは、植物園を見学した後、ベンチに座ってしばらくくつろいだ。帰り際、植物園の近くに献血車が止まっていた、献血をしてほしいと頼まれた。子田くんは、自分は糖尿の傾向があるから、と嘘をついて断った。翌日私は朝から用事があったので、食事を終えんとそろそろ家に帰ることにした。子田君もこれからレポートをいくつか書かなければならないということだった。

子田君の家を出ると、あたりはもうずいぶん暗くなっていた。いつのまにかすっかり日が暮れてしまっていたのだ。私は車に乗って家路へと急いだ。私たちは、また近いうちに会おうと約束した。

Table 6 語彙決定課題で用いたターゲット語

練習試行		本番試行	
有意味語	無意味語	有意味語	無意味語
たたみ	うきす	そしき	せむい
てんき	すうた	したく	こしん
みなと	ほいろ	しみん	たいり
むすめ	すんち	たんす	ぬなわ
よそう	うわに	おなか	まかわ
		きおく	いとく
		さいふ	くけつ
		つくえ	ぬなみ
		ようす	うわに
		りゆう	りんも
		かいわ	れいう
		くるま	とかき
		せなか	そんち
		とけい	とまら
		はたけ	ついで

*note.* 無意味語は小柳・石川・大久保・石井（1960）から，熟知価が0.00–0.49の単語を選択して用いた。これらの単語の意味はほぼ知られておらず，無意味語として使用できると考えられる。